特別史跡 キトラ古墳の調査
(飛鳥藤原第178－6次調査)
記者発表資料

平成25年12月5日
奈良文化財研究所

【発表要旨】

キトラ古墳は7世紀末から8世紀初頭に位置づけられる二段築成の小規模な円墳である。昭和58年に石室内の壁画が確認されて以降、数次にわたる調査をへて、このほど、石室に関する調査がすべて終了した。本年9月に、石室埋め戻し前の最終調査として、墓道部の調査を実施した。その結果、石室南側で地震の痕跡を確認した。また、石室南側にある柱穴内部で柱の抜取穴を検出し、石室南壁石の下辺に梃子穴の存在を確認した。

【遺跡名】 特別史跡 キトラ古墳

【調査地】 明日香村大字阿部山小字ウエヤマ

【調査機関】 奈良文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会

【調査担当】 若杉智宏（奈良文化財研究所）
水野敏典（奈良県立橿原考古学研究所）
相原嘉之（明日香村教育委員会）

【調査期間】 平成25年9月17日～25日

【調査面積】 7.5 ㎡

【検出遺構】 地震痕跡、柱穴、石室南壁石の梃子穴

【出土遺物】 なし

調査の概要

石室の埋め戻し作業に入る前の最終調査として、平成 14･15 年（2002・2003）度調査の埋め戻し土を除去し、墓道部を再検出して３次元レーザー測量を実施した。また、墓道部に発掘せずに保存した墓道埋土（版築層）の土層断面の剥ぎ取り作業をおこなった。

埋め戻し土の除去にあわせ、平成 14･15 年度調査の遺構面を再精査したところ、以下の考古学的成果が得られた。

調査成果

1　石室の南側で、地震痕跡を確認

石室の閉塞石（南壁石）から約２ｍ南で、墓道部を東西に横断する地割れ痕跡を確認した。検出した地割れ痕跡は、幅 60 ㎝、深さ 30 ㎝以上でＶ字状に開くと考えられ、内部には上部の版築が落ち込んでいる。地割れの南側では、墓道床面が 25 ㎝ほど沈下しており、コロレール痕跡が高さを違えて検出された。

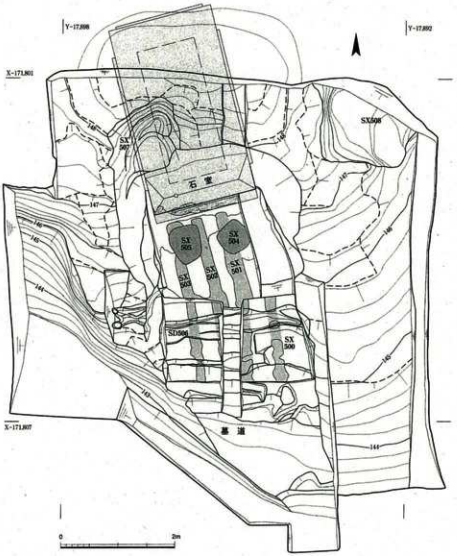
過去の調査では、このＶ字状の落ち込みを、東西方向の溝（ＳＤ 506）と認識していたが、高松塚古墳の墓道部にも同様の地割れを確認していることから、地震による地割れと判断した。高松塚古墳と同じく、90 ～ 150 年周期で近畿地方を襲う南海地震の爪痕と考えられる。

2　石室南の柱穴で、柱の抜取穴を確認

石室のすぐ南で検出していた柱穴ＳＸ 504・505 において、柱の抜取穴を確認した。柱穴の大きさは 65 ～ 80 ㎝、深さは 20 ㎝。抜取穴の大きさから、柱の太さは 10 ㎝ほどであったと推定できる。コロレール痕跡との重複関係から、石室を閉鎖した後に穴を掘り、柱を立てたことがわかる。柱を立てた目的は不明であるが、墓道を埋める直前の墓前祭祀に関わるものである可能性が考えられる。同様の柱穴は、高松塚古墳（径 50 ～ 60 ㎝、深さ 15 ㎝）、石のカラト古墳（径 20 ㎝、深さ 20 ㎝）でもみつかっている。

3　南壁石の下辺に梃子穴を確認

石室の外面を再精査したところ、南壁石南面下辺の西寄りで、新たに梃子穴の一部を確認した。その位置は、南壁石西端から 30 ㎝ほど東で、南壁石と床石の間に詰められた漆喰にわずかな隙間がみられ、その存在を確認することができた。これまでの調査でも、南端天井石の東西両側面に梃子穴を確認していたが、今回、南壁石の下辺にも梃子穴が存在することが判明した。この梃子穴は、高松塚古墳の調査成果を参考にすると、棺を納める際の南壁石の開閉に使用されたと考えられる。



墓道部遺構平面図

文化庁ほか『特別史跡キトラ古墳発掘調査報告』2008 年

3Dレーダー測量

墓道部版築 土層剥取作業

地震による地割れ痕跡(南から)

地震による地割れ痕跡(西から)

石室南側の柱穴 (南から)

南壁石西側の榧子穴 (矢印の部分)